

孤独な努力家についての一考察

— 女子大学生の自己向上努力についての計量分析 —

中山 ちなみ[※]

A Study on Making Efforts for Self-improvement without Others

Chinami NAKAYAMA

近年の大学生は、在学中に多くの免許・資格を取得しようとしたり、熱心に自己啓発に取り組むなど、自己を向上させることを目標としてさまざまな努力をしている。それらの努力の多くは個人的になされることが多い。こういった孤独のうちになされる努力は、いかなる性質をもつものかを明らかにするために、女子大学生を対象とした調査データの計量分析をおこなった。分析の結果から浮かび上がってきたことは、他者との連帯を欠いた「孤独な努力家」の少々危うい姿である。個人的な努力が安定してなされるためには、他者との連帯が不可欠であると思われる。

1 問題の所在

バブル経済の崩壊をひとつの契機として、日本人の価値観は大きく転換したということがしばしば議論される。例えば、これまで日本の発展を支えてきた「努力する」「頑張る」という美德が失われつつあるということが、もっともらしく語られたりする。頑張ることは格好悪い、努力しても報われないという風潮が、とりわけ若い世代を中心に広がっていることを危惧するような論調が目立つ。

いわゆる「失われた 10 年 (20 年)」の間に、若者をはじめとする日本人の努力観が変容したのではないかという問題については、これまでメディア等で頻繁に取り上げられてきたほか、高校生や大学生を対象とした調査で検証が試みられたりしている¹⁾。

近年の若者の「努力」「頑張る」に関する見解は、大きく 3 つに整理できるだろう。(1) 若者は頑張らなくなった、(2) 頑張る若者と頑張らない若者に二極化している、(3) むしろ最近の若者のほうが頑張っている、というものである。また、その要因についても「モノにあふれた豊かな時代しか知らないためにハングリー精神が失われた」「価値観が多様化し、何に向かって頑張ればよいのかという“正解”がなくなった」「不況で正規の職に就くことが難しく、あきらめ、無力感が漂っている」などさまざまな文脈で論じられているが、現代の努力観や努力の実態を、単純に「若者」という一括りで捉えることは難しく、

キーワード：目標設定、自己への関心、連帯

Key Words : Aging, goal setting, interest in oneself, solidarity

※ 本学文学部現代社会学科

建設的でもないと思われる。

日常的に女子大学生と接している筆者の印象では、最近の学生はとても忙しく、また、とても頑張っているように思われる。本業である大学での勉強やクラブ・サークル活動のほか、ほとんどの学生がアルバイトを経験している。免許や資格を取得しようとする学生も多く、ボランティアなどの社会参加活動にも積極的である。インターンシップを経験する学生も増加している。おそらく、筆者の学生時代の20年前よりも大学生の授業の出席率は高く、勉学に対する態度もまじめである。また、近年の大学生は卒業後の進路についても具体的な目標を持っており、就職活動における企業研究や自己分析などは、以前とは比べものにならないくらい熱心に取り組まれている。

普通に考えるならば、頑張ること、努力すること、その結果として体験を積んで経験値を高めることは大いに推奨されるべきであり、頑張ることに価値を見出す大学生が増えていけば大変喜ばしいことである。その動機がいかなるものであり、また、頑張った結果がたとえ目標に届かなかったとしても、努力をしたという事実は長い目で見れば決して無駄にはならない。頑張るという行為は、目標が達成されたか否かという結果だけでなく、その努力の過程においても意味を持ちうるものであり、その過程が苦しく困難であっても、一方で喜びや充実感をともなうことも多い。だからこそ我々は頑張れるのだともいえる。

しかし学生たちを見ていると、忙しく活動しているのは自分自身で設定した目標であるにもかかわらず、何となく「しんどそう」にしているように見受けられるのである。忙しすぎて身動きがとれないということもあるのかもしれないが、その「しんどさ」は、筆者には「一人で頑張っている」ことに原因があるような感じがするのである。

そこで、本稿は、努力することに価値をおきながらも、それを「一人で」遂行している者に注目し、その意識や行動を明らかにしようと思う。ここではそのような者を「孤独な努力家」と呼ぶが、本稿はこの孤独な努力家の像をより明確にとらえるための試みである。

2 孤独な努力家の抽出

2.1 データ

今回の分析に用いるのは、2012年11月にノートルダム清心女子大学の学生を対象として実施された「大学生の人間関係と社会意識に関する調査」のデータである²⁾。この調査は、ノートルダム清心女子大学で「青少年問題」の講義を受講している学生の皆さんに回答のご協力をいただいた。講義時間中に受講者に調査票を配布し、10分程度で回答していただき、その場で回収するという方法で実施している。調査票は315名に配布し、うち310名から有効回答を得た。有効回収率は98.4%である。

2.2 努力の指標

まず、努力や経験をすることに価値を置く者がどの程度いるのかを確認しておくことにする。表1に示したのは、「たとえ結果は失敗に終わるとしても、努力することが重要だ」「結果だけでなく、努力も評価されるべきである」「たとえ時間がかかっても何事も自分で経験することが大切だ」という質問項目に対する回答の分布である。

表1 努力することに対する意識

	そう思う	ややそう思う	あまり そう思わない	そう思わない	計 (%)
たとえ結果は失敗に終わるとしても、努力することが重要だ	172 (55.7)	127 (41.1)	8 (2.6)	2 (0.6)	309 (100.0)
結果だけでなく、努力も評価されるべきである	175 (56.8)	124 (40.3)	9 (2.9)	0 (0.0)	308 (100.0)
たとえ時間がかかっても何事も自分で経験することが大切だ	86 (27.8)	180 (58.3)	42 (13.6)	1 (0.3)	309 (100.0)

表1の3つの項目はそれぞれ少しずつニュアンスが異なるが、いずれも努力や経験することを肯定的に述べたものであり、これらに対して9割前後の者が「そう思う」「ややそう思う」と回答している。本人が実際に努力しているかどうかはともかく、努力すること自体を否定する者は皆無に近いことがわかる。

本稿が論じようとする「孤独な努力家」を抽出するためには、努力への態度および他者への関与に関する意識の指標が必要である。まず努力への態度を測定する指標として、表1の3項目を用いて努力肯定尺度を作成する。3項目で主成分分析をおこない、固有値1以上で因子の抽出を打ち切ると、第1主成分のみが抽出された（分散の説明率51.4%）。この第1主成分を努力への肯定的意識を表すものと考え、第1主成分得点を努力肯定得点とする。

表2 努力肯定に関する3項目の主成分分析結果

	第1主成分
たとえ時間がかかっても何事も自分で経験することが大切だ	.538
たとえ結果は失敗に終わるとしても、努力することが重要だ	.830
結果だけでなく、努力も評価されるべきである	.750
分散の%	51.374

2.3 連帯の指標

孤独な努力家の「一人で頑張る」というときの「一人で」は、単独で行動するという意味ではない。自身の目標の設定時や達成までの遂行過程において、その目標を他者と共有したり、互いに励まし合ったり、課題を一緒に乗り越えていこうという気持ちを持っているか否かという、他者と関与することに関する志向性を指している。つまり、連帯や共感への志向性と言い換えることができるだろう。

ここでは、連帯や共感の前提となる内面を開示しあうような関係を友人との関係において構築しようとするか、あるいは実際に構築できているかという内容の質問項目を使用する。すなわち「友達に自分の欠点や悩みを気づかれたくない」「友達のことでも、できれば面倒なことには関わりたいくない」「友達との関係が表面的であると感じる」「友達に自分の本音をさらけ出しても、真剣に答えてもらえない気がする」の4項目であり、いずれも「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答されている。

この4項目についても、主成分分析の結果、第1主成分のみが抽出された（分散の説明率43.1%）。この第1主成分得点を連帯志向尺度の得点とする。

表3 連帯・共感に関する4項目の主成分分析結果

	第1主成分
友達に自分の欠点や悩みを気づかれたくない	.507
友達に自分の本音をさらけ出しても、真剣に答えてもらえない気がする	.764
友達との関係が表面的であると感じる	.725
友達のことでも、できれば面倒なことには関わりたくない	.597
分散の%	43.067

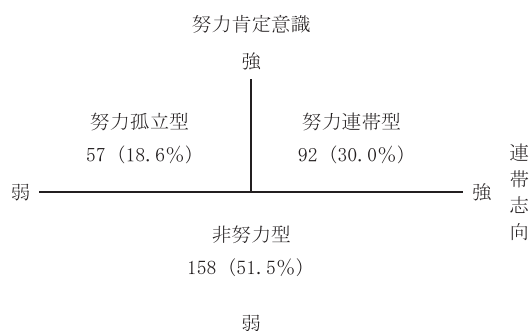
2.4 類型の設定

以上で作成した2つの尺度を組み合わせることで頑張り方の類型を設定し、「一人で頑張る」タイプである孤独な努力家を抽出しよう³⁾。

まず、努力肯定得点を上位群・下位群に分けることで、努力を肯定する意識が相対的に高い者と低い者に分ける。さらに努力肯定意識の強い者を、連帯志向の強弱によって2つに分ける。これにより、以下の図1に示したような3つの類型を構成することができる。

これらを、努力することを肯定し連帯を志向する「努力連帯型」、努力を肯定し一人で頑張る「努力孤立型」、努力を肯定する意識が相対的に低い「非努力型」と命名する。本稿が特に注目しようとする孤独な努力家は、努力孤立型である。

図1 頑張り方の3類型と、各類型に含まれる人数



次節からは、この3類型での比較をおこない、努力孤立型すなわち孤独な努力家の特徴を追っていくことにする。

3 孤独な努力家の日常

3.1 免許・資格志向

大学生が取り組む努力の方法として一般的であると考えられるのが、免許や資格を取得することであろう。表4は、「免許や資格は、できるだけ多く取得したい」という質問項目に対して、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」という4点～1点の4件法で回答してもらい、類型ごとに平均点を算出したものであ

る。得点が高いほど、よりあてはまることを意味する(以下の分析においても同様)。なお、最も平均点の高いセルには網掛けを施している。

3類型で比較すると、努力を肯定する意識が相対的に低い非努力型の得点が低くなることは予想された結果であるが、努力連帯型と努力孤立型との比較では後者のほうがより免許・資格を取得したいという意識が強いことがわかる。

表4 類型別にみた免許・資格志向

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
免許や資格は、できるだけ多く取得したい	3.22	3.53	3.08	3.21	.001

注) 表中の数値は、各項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法での回答を4~1点に得点化し、類型別に平均点を算出したものである。得点が高いほどその傾向が強いことを意味する。以下の表においても同様である。

3.2 忙しさ

次の表5は、時間の使い方や忙しさに関する項目の比較である。「充実した生活を送ることを重視している」「予定が埋まっているときほど充実していると感じる」「暇な時間があると時間を無駄にしていると考えるほうだ」「『自分はいつも忙しい』とよく思う」といういずれの項目においても、努力孤立型の得点が最も高くなっている。

表5 類型別にみた時間の使い方に関する意識

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
充実した生活を送ることを重視している	3.35	3.46	3.07	3.22	.000
予定が埋まっているときほど充実していると感じる	3.26	3.54	2.85	3.10	.000
暇な時間があると時間を無駄にしていると考えるほうだ	2.32	2.77	2.20	2.34	.001
「自分はいつも忙しい」とよく思う	2.40	2.60	2.30	2.38	.065

表4および表5からは、努力孤立型の忙しい生活の様子をうかがうことができる。免許や資格はできるだけ多く取得したい。充実した生活を送ることを重視するが、その充実度は予定が埋まっていることで確認される。暇な時間は無駄であり、予定を埋めなければならない。そして実際に「忙しい」と感じているが、その忙しさこそが「充実した生活」であると彼女たちにはとらえられているのであろう。

努力孤立型の目標設定は、努力の成果が実感できるように明確化されている。免許や資格の取得は、自分の能力が高まったことの証であり、予定が埋まっているという状況も時間を無駄にせず有効に使えているという実感につながる。ただ「向上」や「充実」を目標にするだけでは、努力の成果はなかなか見えにくい。そのような目標は、より明確で具体的な目標に再設定され、それを達成しようとひたすら頑張るのが努力孤立型の努力のスタイルであるといえる。

3.3 無駄の排除

努力孤立型は、無駄なことには関与しようとしないう傾向も強い(表6)。明確な努力目標が設定され、常に忙しくしている努力家だからこそ、無駄なことには関わらずに目標達成

を最優先に考えるのかもしれない。逆の言い方をすると、「無駄なことの中にも価値がある」という考え方にはあまりなじまないタイプであるともいえる。

表6 類型別にみた無駄の排除意識

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
無駄なことにはできるだけ関わらないようにするのが得策だ	2.34	2.77	2.64	2.57	.001

3.4 結果よりも過程

以上みてきたように、資格や免許をできるだけ多く取得したいと考え、予定が埋まっていることで生活の充実を実感し、自分にとって無駄と思われることは排除しようとする傾向を持つ努力孤立型の特徴は、自身の努力の成果を目に見えるかたちで確認したいという意識の表れであると考えられる。この意識は、手っ取り早く結果のみを得たい、結果のみが重要であるという効率志向や結果重視志向と容易に結びつくと考えられるが、実はそうではない。表7からは、「途中の過程や説明はどうでもいいから、すぐに結果や答えを知りたい」「何事においても過程はどうであれ結果こそが重要だ」と考える傾向が強いのは非努力型であり、努力孤立型は「手間や時間をかけずに結果さえ出ればよい」という考え方をしているわけではないことがわかる。

表7 類型別にみた「結果」に対する考え方

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
途中の過程や説明はどうでもいいから、すぐに結果や答えを知りたい	2.45	2.54	2.58	2.53	.478
何事においても過程はどうであれ結果こそが重要だ	2.20	2.14	2.45	2.32	.006

3.5 自己責任

努力孤立型は、結果だけで物事の成否を評価しようとする意識は相対的に低いが、表8に示したように、その結果に対する自己責任意識は、努力連帯型とともに高い。自らに課した努力目標の成果は、いかなる結果になろうと自分自身の責任であると考えていることになる。明確な努力目標を設定し、無駄なことに手を出さずにひたすら努力し続ける努力孤立型が、努力は自分で引き受けたものである以上、失敗してもその責任は自分が負わなければならないと考えているとしたら、彼女たちにとってこれほど逃げ場のないプレッシャーはないであろう。

表8 類型別にみた自己責任意識

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
もし自分の選択で失敗したら、それは自分の責任である	3.54	3.54	3.27	3.40	.001

4 孤独な努力家の「努力」はどこから生じるのか

4.1 自己への強い関心

孤独な努力家である努力孤立型は、他者との関わりが相対的に弱い人びとである。この

ことは、努力孤立型が自分自身に対して強い関心を持っていること、そして自己を高めるために努力したいという意識が強いことを予想させる。

そこで、努力孤立型が自己についてどのような意識を持っているのかを、他の類型と比較してみたい。表9は、自分らしさに関する3つの項目について回答の得点平均を類型別に示したものである。「どこかに今の自分とはちがう本当の自分があると思う」という意識には、現在の自分には満足できていない、現在は本当の自分を出し切れていない、いつかもっと自分らしい自分に成長できるはずだ、という気持ちが含まれていると考えられる。この意識が最も強いのは努力孤立型である。また、「自分らしさがないということは不安だ」「自分らしさを得るためには努力が必要だ」という意識も強い。努力孤立型は、「自分らしさがない」という現状に不安を感じており、「自分らしさ」は努力することによって得られると考えていることがわかる。

表9 類型別にみた自己意識

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
どこかに今の自分とはちがう本当の自分があると思う	2.62	3.19	2.82	2.83	.000
自分らしさがないということは不安だ	2.58	3.02	2.50	2.62	.001
自分らしさを得るためには努力が必要だ	2.38	2.84	2.35	2.45	.001

4.2 劣等感と優劣意識

では、このような考え方の背後にはどのような価値観が存在しているのだろうか。表10は、自分と他者との優劣関係に関する意識を類型ごとに比較したものである。努力孤立型は、「人より劣っていたくない」「他人より劣っているか優れているかを気にしている」といった他者との優劣を3類型の中で最も気にしていることがわかる。そして、「自分は人より劣っていると感じる」という劣等感も非常に強い。

表10 類型別にみた優劣意識

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
人より劣っていたくない	2.86	3.30	2.96	2.99	.001
他人より劣っているか優れているかを気にしている	2.40	2.91	2.65	2.63	.001
自分は人より劣っていると感じる	2.70	3.02	2.80	2.81	.064

同様のことは、表11からも読み取れる。「友達の発言が、上から目線だと感じることがある」「友達にバカにされたくない」のいずれにおいても、努力孤立型の得点が最も高い。努力孤立型は、友人より「上」か「下」かということに敏感であり、自分のほうが「下」にはなりたくないと考えていることがうかがえる。友人関係においても、自らの位置を上下で判断し、自分が「下」にならないように努力する。これは劣等感の裏返しとも解釈しうるし、友人グループ内での自分の位置を確保するために、友人たちが序列を争う競争相手に転化しているともいえる。

表 11 類型別にみた友人との上下意識

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
友達の発言が、上から目線だと感じることがある	1.93	2.63	2.28	2.24	.000
友達にバカにされたくない	2.53	2.84	2.70	2.68	.065

劣等感や優劣意識は、「他者と比較して自分はどのように位置づけられるか」という意識であり、他者の存在を前提とした意識である。その意味では、努力孤立型は他者に対して無関心なわけではない。しかし、他者の存在を念頭におきつつも、「(他者と比べて)自分はどうか」という問いが最終的に行き着くのは「自分は」の部分である。つまり、努力孤立型の主な関心は自分自身に向けられていることになる。

このように優劣や競争の対象として他者をとらえている限り、そこから連帯や共感といった意識が生み出される契機にはなりにくいであろう。劣等感や優劣意識を土台として自分自身に振り向けられる目標設定は、他者よりも「上」であることをめざすゆえに他者と目標を共有することもできず、またその努力が完結することはない。なぜならば、彼女たちは常に他者よりも上に位置しているように頑張り続けなければならないからである。

4.3 社会をどう見るか

孤独な努力家たちの社会観についても表12でみておくことにしよう。努力孤立型は、「日本社会は結果が重視される社会だ」と考え、「今の社会は、努力が報われない社会だ」とも感じているようである。また、「今の世の中、これをすれば安心だという行動がない」「今の社会では、何を目標にすれば良いのかわからない」という意識も努力孤立型が最も強い。

孤独な努力家たちは、指標となるような行動がなく、何を目標にすれば良いのかわからないのに、自らに高い目標を課して頑張り続けなければならないのである。しかも結果のみが重視され、努力しても報われないと感じているとするならば、これは八方ふさがりの苦しさである。

表 12 類型別にみた社会観

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
日本社会は結果が重視される社会だ	3.30	3.39	3.16	3.25	.050
今の社会は、努力が報われない社会だ	2.67	3.19	2.81	2.84	.000
今の世の中、これをすれば安心だという行動がない	3.15	3.47	3.14	3.21	.002
今の社会では、何を目標にすれば良いのかわからない	2.54	3.04	2.86	2.80	.000

5 孤独な努力家たちの「孤独」の特徴

5.1 友人とのつきあい方

目標に向かって頑張るという行為は、ただ目標が達成されるというだけでなく、ともに目標を共有したり同じ時間を過ごしたりすることで他者との関係を強化・改善するという結果をもたらすことがしばしばある。しかし、本稿で注目している孤独な努力家は「一人で頑張る」タイプである。彼らの対人観や他者関係にはどのような特徴があるのだろうか。

そして、一人で頑張ることは対人関係に影響を及ぼすのだろうか。

表 13 は、友人とのつきあい方に関する質問項目を類型別に比較したものである。「同じ友達と行動することが多い」「友達といるときは、暗い話をするよりも明るい話をしてほしい」「友達といるとき、場が楽しくなる、盛り上がることを一番重視する」という 3 項目のいずれにおいても、努力孤立型の得点が最も高くなっている。

努力孤立型は、友人たちから孤立しているわけではない。彼女たちはいつも決まったメンバーで行動する傾向があり、明るく楽しい話題で盛り上がってられるような関係を重視していることがわかる。

表 13 類型別にみた友人とのつきあい方

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
同じ友達と行動することが多い	3.58	3.63	3.38	3.49	.008
友達といるときは、暗い話をするよりも明るい話をしてほしい	3.40	3.49	3.04	3.23	.000
友達といるとき、場が楽しくなる、盛り上がることを一番重視する	3.07	3.21	2.92	3.02	.036

5.2 友人への過剰な気づかい

この明るい友人関係の内実をもう少し探ってみよう。表 14 は、友人への同調傾向に関する項目の比較である。「空気が読めない (KY な) 発言をしないよう気をつけている」「空気を読んで行動することは大切だ」「自分の思ったことを言うよりも、空気を読んで発言することを優先する」など、「空気を読む」行動をしているのは努力孤立型である。また、努力孤立型は「友達と意見が異なっているとき、友達の考えに合わせることが多い」「友達と意見が対立する状況になることは避ける」といった、友人との対立を避けようとする傾向も強く、「友達が自分のことをどう思っているか、いつも気になる」の得点も非常に高い。

これらからうかがえるのは、努力孤立型は普段から友人に非常に気をつけているということである。空気を読み、友人との対立を避けて同調し、友人が自分のことをどう思っているのかということをいつも気にかけている。明るい話題で盛り上がるような関係を保ちつつも、その関係は努力孤立型にとっては、「安心できない友人関係」「ほっとできない友人関係」になっているといえる。

表 14 類型別にみた友人への同調傾向

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
空気が読めない (KY な) 発言をしないよう気をつけている	2.92	3.19	2.91	2.97	.066
空気を読んで行動することは大切だ	3.52	3.63	3.34	3.45	.001
自分の思ったことを言うよりも、空気を読んで発言することを優先する	2.54	2.93	2.56	2.63	.003
友達と意見が異なっているとき、友達の考えに合わせるが多い	2.53	2.93	2.66	2.67	.007
友達と意見が対立する状況になることは避ける	2.45	3.00	2.61	2.63	.000
友達が自分のことをどう思っているか、いつも気になる	2.63	3.12	2.69	2.75	.001

5.3 自己の使い分け

この友人への過剰な気づかいは、「自己の使い分け」という問題にも関わっている。表15は、「話す友達によって自分と偽の自分を使い分けている」「話す友達によって自分のキャラが変わることがある」の2項目を類型別に比較したものである。いずれも、努力孤立型の得点が非常に高くなっている。

孤独な努力家は、話す相手に応じて自分を使い分けているという自覚が3類型の中で最も強く、「キャラ」というある種のツールの使用が顕著であることがわかる。

表 15 類型別にみた自己の使い分けの認知

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
話す友達によって自分と偽の自分を使い分けている	2.34	2.88	2.66	2.60	.001
話す友達によって自分のキャラが変わることがある	2.77	3.37	3.04	3.02	.000

5.4 異なる価値観の受け入れ

これまでみてきたことから、孤独な努力家は、安心できるような友人関係を構築できていないことがわかる。逸脱への不安と過剰な適応がそこには存在するのである。そして、そのことを彼女たち自身も肯定的にはとらえていないようである。

表16は、多様な価値観の受容に関する考え方の類型別比較を示したものである。努力孤立型は「どんな価値観の人でも社会に受け入れられるべきだ」と最も強く考えているのである。この結果は、彼女らの「自分たちを排除しないで」という心の声を反映したものと筆者には思える。

表 16 類型別にみた多様な価値観の受容に関する考え方

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
どんな価値観の人でも社会に受け入れられるべきだ	3.20	3.60	2.96	3.15	.000

6 孤独な努力家の道具的関心

近年の大学生たちの多くが関心を持つ努力目標として、免許・資格の取得とともにあげられるのが「コミュニケーション能力」の向上である。コミュニケーション能力は「コミュ力」とも略され、若い世代にとっては、現代社会で生き残っていくためには不可欠の能力といっても過言ではないような受け取られ方がされている。

また、コミュニケーション能力の対語として「コミュニケーション障害（コミュ障）」という言葉も生まれており、友人の数が少ない人を「コミュ障」「コミュ力が低い」と見下したり、就職活動の面接がうまくいかないときには「自分はコミュ障かも」と深刻に悩んだりするなどの事例もメディア等で頻繁に紹介されている⁴⁾。このコミュニケーション能力のとらえかたに類型によって差異がみられるのかをみてみることにしよう。

表17は、「コミュニケーション能力とはどのような能力だと思いますか」という質問の中で、A「気の利いたことや場を和ませることが言えたり、相手に上手に説明できる話術」と、B「相手が伝えようとしていることを的確につかみとり、情報や感情を共有できる能力」とい

う2つのイメージを提示し、AとBのどちらのイメージに近いかを4件法で回答してもらった結果を示している。質問文からわかるように、Aはコミュニケーションの情緒的な側面を重視するものであり、Bはコミュニケーションの合理的な側面を重視するものである。これらはそれぞれ、コミュニケーションの表出的側面と道具的側面を表しているといっていよう。

表17をみると、孤独な努力家である努力孤立型において、コミュニケーションを道具的にとらえる傾向が最も強いことがわかる。

表17 類型別にみたコミュニケーション能力のイメージ

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
コミュニケーション能力は、話術か意思疎通能力か	2.61	2.81	2.47	2.57	.040

注)「あなたは、コミュニケーション能力とどのような能力だと思いますか」という問いに対して

A：気の利いたことや場を和ませることが言えたり、相手に上手に説明できる話術

B：相手が伝えようとしていることを的確につかみとり、情報や感情を共有できる能力

という2つのイメージを提示し、AとBのどちらのイメージに近いかを4件法で回答してもらっている。表中の数値は類型ごとにイメージ得点の平均を算出したものであり、数値が高いほどBのイメージに近いことを意味する。

孤独な努力家のコミュニケーションの道具的なとらえ方は、彼女たちのコミュニケーション能力の獲得についての考え方にも関連する。表18に示したように、努力孤立型は「コミュニケーション能力は、研修や講座などでスキルを学べば、より確実に身につけることができる」「就活に必要なコミュ力、恋愛で必要なコミュ力というように、各場面に対応したスキルや知識をそれぞれ学ぶ必要がある」と、コミュニケーションを「スキル」「知識」ととらえ、研修や講座で学べるものと考えているのである。彼女たちにとっては、コミュニケーションすらも「お勉強」の対象なのである。

表18 類型別にみた「スキル」としてのコミュニケーション能力のイメージ

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
コミュニケーション能力は、研修や講座などでスキルを学べば、より確実に身につけることができる	2.41	2.75	2.40	2.47	.008
就活に必要なコミュ力、恋愛で必要なコミュ力というように、各場面に対応したスキルや知識をそれぞれ学ぶ必要がある	2.96	3.18	2.87	2.95	.021

こういった道具的な関心は、他の場面でも顔を出す。表19は、「自分で工夫して物事を行うより、マニュアルがあるほうがよい」と考える程度を示したものであるが、マニュアル志向の傾向が3類型の中で最も強いのは「孤独な努力家」なのである。

表19 類型別にみたマニュアル志向

	努力連帯型	努力孤立型	非努力型	全体	有意確率
自分で工夫して物事を行うより、マニュアルがあるほうがよい	2.67	3.11	2.83	2.83	.004

7 おわりに

本稿では、一人で頑張るタイプである「孤独な努力家」を、近年の大学生たちの頑張りのひとつの典型であると仮定して、その特徴を明らかにしてきた。今回の分析において、

孤独な努力家すなわち努力孤立型にみられた特徴は、以下のようなものである。

免許・資格志向が強く、充実した生活をめざして予定を埋め、忙しく生活している。そのために無駄なことはできるだけ排除しようとする。結果重視主義ではないが、自身の選択した行為の結果については、その成否はどうであれ自身で責任を持たなければならないと考えている。

孤独な努力家は、自己への関心が非常に強い。自己の現状に満足できておらず、自己をより向上させたいと強く思っている。そして、自己の向上という目標を設定し、その達成に向けて努力を傾けることをいとわない人びとである。しかし、能力を高める、成長するといった目標は、努力すべき内容が曖昧で不明確であり、どの程度達成できたかという努力の成果も実感しにくい。そのため、目標は明確で成果がわかりやすい数値目標などに置き換えられる。孤独な努力家が、免許・資格志向が強い理由のひとつはここにあるといえる。

また、孤独な努力家は劣等感が強く、他者より「上」か「下」という優劣意識も強い。そのため、人より劣っているかどうかということに敏感であり、人より劣っていたくなくとも思っている。このように、他者との比較によって自身の位置を確認しようとする態度は友人関係においてもみられるが、それは「他者よりも劣っていない自分であるための努力」を生み出しているといえる。そのことが、自己を向上させようとする努力行為に結びつく。

他者（友人）との関係では、決まったメンバーで明るく楽しいノリを重視したつきあい方をしており、孤独な努力家とて決して完全に孤立しているわけではない。しかし、場の空気を読み、友人との対立を避けて同調するなど、普段の友人関係の中で孤独な努力家は非常に気をつけている。相手によって自分を使い分けようとする傾向も強く、ここにも相手に合わせようとする志向性を見出すことができる。一見したところ良好な友人関係の基盤は、非常に不安定なものなのである。

道具的な関心が強いのも孤独な努力家の特徴である。コミュニケーション能力をスキルを向上させることで高めようとしたり、マニュアル志向が強いことに、この特徴が表れている。

「孤独な努力家」のこれらの特徴をみると、筆者はそこに現代社会が要求する人物像との対応を感じざるをえない。社会的な諸場面におけるマニュアル化の進展、資格の重視、「勝ち組」「負け組」という分け方の横行、自己責任の重視、個性の重視、こういったものに彼女たちは必死で適応しようとしているのではないかと感じてしまうのである。彼女たちの姿勢は社会的な要請に従ったものなのだろう。

しかし、彼女たちのこうした適応の背後には、大きな不安定要素が存在している。友人関係における同調と演技の傾向は、彼女たちがいかに不安と緊張を抱えているのかを表すものである。彼女たちは安心できる社会関係、深い人間関係を構築できていないのである。これらのことをみると、筆者にはこれらもまた現代社会の問題性と符合しているように思える。連帯の再構築こそ現代社会の重要問題であるからである。孤独な努力家の「しんどさ」は、個人の問題であると同時に現代社会の問題でもあったのである。

努力は重要なことである。しかし、他者との連帯を欠いた努力は、安心や幸福をもたらさないもののようなものである。温かい他者との関係は、個人的な努力をするうえでも必要不可欠なものだと思われる。

謝辞

本稿の分析に使用した「大学生の人間関係と社会意識に関する調査」に協力して下さった「青少年問題」ご担当の西隆太郎先生および受講生の皆さん、そして、この調査データを使用することを快諾して下さった卒業生の大室裕香さん、寒木絢香さん、山下紗恵子さんに深く感謝申し上げます。

注

- 1) 例えば山田昌弘がこの問題を論じているほか [山田, 2007; 2009]、近年の高校生が親世代よりも「まじめ化」しているという尾嶋史章らの調査結果を掲載した2012年11月21日の『朝日新聞』記事、大学生が学生生活で最も重点をおいていることが1991年は「よき友を得たり豊かな人間関係を結ぶことを第一においた生活」であったのが、1998年には「勉強や研究第一」が逆転したことを示す全国大学生生活協同組合連合が実施した調査の分析結果を掲載した2012年12月7日の『朝日新聞』記事など。
- 2) この調査は、当時、本学文学部現代社会学科4年生であった大室裕香、寒木絢香、山下紗恵子の三氏が卒業論文執筆のために共同で実施したものである。
- 3) 努力肯定意識と連帯・共感志向の主成分得点の相関係数は $r=0.262$ と算出され、両者には正の相関がある(1%水準で有意)。
- 4) 例えば、『AERA』で特集された「『コミュ力なし』は『内定なし』」(2010年11月29日発行)や、『毎日新聞』の記事「気になる『コミュ力』就職活動で、職場で『必要性』独り歩き」(2012年7月2日夕刊)などに、就職活動がうまくいかず「コミュニケーション能力」が低いことに悩む大学生の事例が紹介されている。

文献

山田昌弘, 2007「希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く——」筑摩書房.
——, 2009「なぜ若者は保守化するのか——反転する現実と願望——」東洋経済新報社.

「『コミュ力なし』は『内定なし』」『AERA』2010年11月29日

「気になる『コミュ力』就職活動で、職場で『必要性』独り歩き」『毎日新聞』2012年7月2日

「高校生、親世代よりもまじめ」『朝日新聞』2012年11月21日

「大学生、友人よりも勉強」『朝日新聞』2012年12月7日